

今井四郎ただ一騎、五十騎ばかり(が)中へ駆け入り、鎧ふ

格助詞(連体修飾格) 四段・用

過去「けり」体

んぱり立ち上がり、大声あげて名のりけるは、「日ごろ

四段・用

四段・用

下二・用

四段・用

強意「じ」終

補助動・四段・命

は音にも聞きつらん、今は目にも見たまへ。木曾殿の御

四段・用 現在推量・終

上二・用

⑤今井↓敵

四段・終

乳母子、今井四郎兼平、生年三十三にまかりなる。さる

⑥今井↓敵

者ありとは、鎌倉殿までも知ろしめされたるらんぞ。

四段・未 尊敬「る」用 現在推量「らむ」体

ラ変・終

⑤今井↓鎌倉殿

存続「たり」体

終助

存続「たり」体

兼平討つて見参に入れよ。」とて、射残したる八筋の矢を、

四段・用・促音便

下二・命

四段・用

さしつめ引きつめさんざんに射る。

上二・終

死生は知らず、

下二・用

形動・ナリ活用・用

四段・未

やにはに、かたき八騎射落とす。そののち打ち物抜いて、

副詞

四段・終

四段・用・イ音便

あれに馳せ合ひ、これに馳せ合ひ、切つてまはるに、

四段・用

四段・用

四段・用・促音便

(おもて) 面を合はする者ぞなき。ぶんどりあまたしたりけり。

形・ク活用・体

完了「たり」用

ただ「射とれや。」とて、中に取りこめ、雨の降る

係助

サ変・用 過去「けり」終

助動詞・比況「やうなり」用

四段・命 間助

下二・用

四段・体

やうに射けれども、鎧よければ裏かかず、あき間を射ね

打消「ず」用

打消「ず」已

上二・用 過去「けり」已

形・ク活用・已

四段・未

ば手も負はず。

打消「ず」終

四段・未

木曾殿はただ一騎、粟津の松原へ駆けたまふが、正月

四段・体

二十一日、入相ばかりのことなるに、薄氷は張つたり

断定「なり」体

⑤作者↓木曾殿

存続「たり」用

けり、深田ありとも知らずして、馬をざつと打ち入れ

ラ変・終

四段・未

過ぎ「けり」終

過去「けり」終

完了「たり」已

たれば、馬の頭も見えざりけり。あふれどもあふれども、

打消「ず」用

下二・未

過去「けり」終

四段・已

打てども打てどもはたらかず。

四段・已

四段・已

四段・未

四段・未

四段・未

今井四郎はただ一騎で五十騎ほどの中へ駆け入つて、

鎧を踏ん張って立ち上がり、大声をあげて名のつたことには、「普段から

噂でも聞いていただろう。今は目で御覧なされ。

木曾殿の御乳母子、

今井四郎兼平、年齢は三十三歳になり申す。その

ような者がいるとは鎌倉殿(頼朝)までもご存じであろうぞ。

兼平を討ち取って(頼朝に)お目にかけてよ。」と言つて射残した八本の矢を、

つがえては引き、次々に射る。生死のほどは分からないが、

たちまちに敵を八騎を(馬から)射落とした。それから刀を抜いて

あちらに(馬を)走らせ、こちらに走らせ、切つてまわると、

面と向かつて立ち合つる者はいない。首や武器をたくさん奪った。

ただ、(敵は)「射殺せ。」と言って、囲んで雨が降る

ように矢を射たけれども、鎧が良い物なので、(鎧の)裏まで矢が通らず、(鎧の)隙間を射ないので手傷も負わない。

木曾殿はただ一騎で粟津の松原へ馬を走らせなせるが、

正月二十一日、夕暮れのことであつた上に、薄氷が張っていて、

深い田があるともわからず、馬をざつと入れ

たので、馬の頭も見えなくなった。煽つても煽つても、

鞭を打てども打てども馬は動かない。